

平成26年度「支援機器等教材を活用した指導方法充実事業」成果報告書

団体名	国立大学法人 東京学芸大学
研究開始年度	平成26年度

I 概要

1 指定校の一覧

設置者	学校名	障害種
国	東京学芸大学附属特別支援学校	知的障害

2 研究テーマ

特別支援学校小・中・高等部における一貫した読み書き学習支援のためのアセスメントと教材システムの構築と評価に関する研究

3 研究の概要

知的障害のある児童・生徒は仮名文字や漢字の習得に困難をもっている。その背景には、文字の形態を識別するという視覚的認知の弱さや、文字と読み方との対応の学習の苦手さ、文字の形態を正確に表記するという文字構成・運筆スキルの困難といった複合的な要因がかかわっている。しかし、このような複数領域の苦手さは、児童・生徒一人一人でその程度が異なるため、指導を開始する前にアセスメントを実施することが重要となる。また、通常、指導には多様なプリント教材を用意する必要があるが、児童生徒の実態に合わせた指導用教材の作成には時間を要する。本研究で活用する支援機器は、現在、学校教育現場で広く用いられているタブレット端末である。タブレット端末は知的障害がある児童生徒にも利用しやすく、教師からの口頭教示に傾注しにくい自閉症のある児童生徒にも有効である。同時に、指導する教員と学習者との間で、端末の画面を介したコミュニケーションが成立しやすいためという利点がある。ただし、指導する教員自身がアセスメントの実施から、プロフィールの作成、学習者のスキル水準に適した学習内容の選定に至る一連の手順がパッケージ化されていることが望ましい。この条件を満たした学習支援ソフトを活用することで、習得度を測るアセスメントの結果から適切な難易度の教材の作成まで、設定目標に向けた一貫性のある指導が可能となるとともに、タブレット端末を用いることにより、教員の指示を待つ必要のない自主学習や、学習者の反応に対し即座にフィードバックの提示が可能となる。

平成26年度は学習支援ソフトを開発し、タブレット端末への搭載を行うとともに、外部専門家と連携して特別支援学校教員を対象とした講習会を行った。特別支援学校小・中・高等部の児童生徒、および、公立中学校の特別支援学級の生徒へ適用し、その成果について評価を行った。

4 研究の成果及び課題

平成 26 年度は、東京学芸大学附属特別支援学校小・中・高等部の児童生徒と公立中学校特別支援学級在籍生徒を対象として、以下の 2 つの段階を踏んだ実践的研究を行った。第一に、各児童生徒の文字の読みと書きに関する幅広いアセスメントを実施し、児童生徒ごとの読み書きスキルのプロフィールを作成した。このプロフィールは「ひらがなの読み」「ひらがなの書き」「漢字の読み」「漢字の書き」の 4 側面について支援ニーズの程度と具体的な支援目標を導き出すためのものであり、このアセスメントの過程を通して、より有効性の高い課題が抽出され、指導方針の設定に有効なプロフィール化が可能となった。第二に、各児童生徒の学習到達度に適した水準のタブレット端末用読み書き学習支援ソフトを開発し、小学部児童に対するひらがなの導入・ひらがなの読み書きの定着、中学部生徒への漢字の読み学習の導入・漢字の読みの定着、高等部生徒への漢字の書字学習の導入・漢字書字の定着をそれぞれ目標として指導を開始した (図 1)。



図 1. 学習支援ソフトの画面の例

学校での活用にあたっては、外部専門家と連携して特別支援学校教員を対象とした講習会を行った。その後、知的障害のある児童生徒へ適用し、その成果について評価を行った。ひ

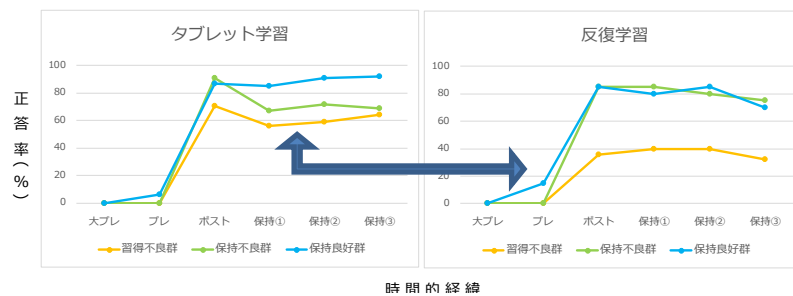


図 2. 特別支援学級生徒を対象とした指導の結果 (反復学習との比較)

らがなで言葉の組み立てを行う指導 (図 1 左) では文字による語の構成がスムーズになった。特別支援学級生徒を対象とした指導では、文字学習に困難を示す生徒において、特にタブレット端末ソフト (図 1 右) の使用が反復書字学習よりも効果的であったことが示された (図 2 ; 指導前から指導後までの成績の推移。文字学習に困難を示す生徒では左側に示すタブレット学習の方が成績は良好)。

また、「読み書き学習支援の実際とポイント—特別支援教育における指導の展開—」と題した読み書き学習の支援マニュアルを作成し、27 年度はタブレット端末に併せた活用を目指している。

指導例 1 事物によるマッチング課題

●子どもの前に、お皿とお箸を、選択肢として置きます。指導者が見本のお皿を提示します。指導者が提示したものと同じものを指さすように教示します。その際に、指導者は、お皿とお皿、お皿とお箸を重ねて、同じもの同士は重ねることができるとを示します。

●①の課題を行うことができない場合には、子どもに見本を渡し、見本を選択肢の上に置くように教示します。これは、選択課題よりもやさしい課題となります。

指導のポイント

指導例 2 透明絵カードによるマッチング課題

●子どもの前に、透明絵カードを複数、選択肢として置きます。指導者が絵カードを、見本として示します。指導者が示したものと同じものを指さすように教示します。その際に、指導者は、透明絵カードを絵カードの上に重ねて示します。違う絵は、重ねられないことを示します。透明絵カードは、透明カードの上に、切り抜いた絵を貼ることで作成します。

●①の課題を行うことができた場合には、絵カードを用いて指導を行います。

●絵カードマッチングができるようになった場合には、かな文字を用いたかな文字単語カードのマッチングを指導します。

指導のポイント

子どもの前に、かな文字単語カードと対応事物を置いておきます。指導者がかな文字単語カードを示し、子どもは、それに対応する事物を取り出して置くことを繰り返します。この行動は、将来の書いたり前でも進んでいく行動です。これによって、生活場面の中で、かな文字単語の利用を促すことができます。